

《論 説》

3 世紀におけるゴート人の侵入

井 上 文 則

【要旨】

3 世紀においてゴート人は、ローマ帝国に繰り返し侵入し、251 年には時の皇帝デキウスを敗死させるなどの深刻な事態を帝国にもたらした。この時期のゴート人の侵入を巡っては、その侵攻が何時、何度あったのか、といった基本的な事実についてすら論争があるが、本稿では特に 3 世紀におけるゴート人の侵攻の性格は、いったいどのようなものであったのか、さらにはそもそも当時のゴート人とはどのような集団であったのかという問題を考察の中心に据えて議論を行い、併せてこの時期の侵入がゴート、ローマの双方にもった歴史的意義について考察を加えた。考察の結果、ゴート人は、通説が考えてきたようなバルト海南岸からの移住民ではなく、フランク人やアレマンニ人同様、黒海北岸の地で 3 世紀に新たに形成された民族であったこと、また、その侵入は単なる略奪を目的としたものであったとはいえ、3 世紀の一連の侵入を通してゴート人が形成されていったことが明らかになった。ゴート人の侵入を促したのは、ササン朝の攻撃を受けて混乱するローマ帝国であったのであり、この意味では帝国の混乱がゴート人の形成、強化に寄与したのであった。ただし、3 世紀においては未だ、ゴート人は黒海北岸における支配的な集団ではなく、ローマ帝国への侵入に際しても、侵入者の一部を構成していたにすぎないと考えられることも指摘した。

はじめに

2 世紀に繁栄を極めたとされるローマ帝国は、3 世紀には危機の時代を迎える。この危機は、社会の様々な面に現れたが、政治的な面に最も顕著に現れた。特に、軍人皇帝時代と呼ばれる 235 年から 284 年のわずか半世紀足らずの期間に、正統とされる皇帝だけで 26 名の皇帝が立ち、篡奪帝も含めるとその総数 50 名を下らない者が皇帝を称したのである¹⁾。そして、この危機に深く関わったのが、外敵の侵入であった。224 年に興起したササン朝ペルシアは、積極的にローマ領内に侵攻し、260 年にはヴァレリアヌス帝を捕虜とするに至り、この事件をきっかけに帝国は分裂状態に陥った。外敵の危機は東方だけに止まらず、ドナウ、ラインの国境では、ゴート、フランク、アラマンニといったゲルマン系の諸部族が、ローマ帝国への侵攻を繰り返したのである。中でも、ゴート人は 251 年には、時の皇帝デキウスを敗死させた。

本稿では、これら軍人皇帝時代のローマ帝国に侵攻した外敵のうち、ササン朝と並んで深刻な事態を帝国にもたらしたゴート人を取り上げて考察を行う。この時期のゴート人の侵入を巡る問題は、その侵攻が何時、何度あったのか、といった基本的な事実についてすら論争があるが、ここでは特に3世紀におけるゴート人の侵攻の性格は、いったいどのようなものであったのか、さらにはそもそも当時のゴート人とはどのような集団であったのかという問題を考察の中心に据えて議論を行い、併せてこの時期の侵入がゴート、ローマの双方にもった歴史的意義についても考えたい。

1. 3世紀のゴート人侵入の研究史—その性格を巡って—²⁾

3世紀のゴート人の侵入について現在でも基本となる研究を行ったのは、A・アルフェルディであった。しかし、アルフェルディの関心は専らゴート人侵入の歴史的経過の復元に向けられたため、ゴート人の侵攻がどのような性格のものであったのかということについては正面から論じられることはなかった。したがって、この問題は、あくまでも付随的に言及されているに過ぎないのであるが、アルフェルディは、1939年に刊行された『ケンブリッジ古代史』所載の論考の中で、次のように述べている³⁾。「ゴート人の新しい居住地は、概して肥沃で、人口希薄な土地であった。それゆえ、彼らを南方へ導いたのは、飢餓や耕作地の必要性、あるいはその欠如ではなく、若いエネルギーの横溢と冒険心であった・・・」と。この文章には、多少の説明が必要であろう。ここで言われている新しい居住地とは、ゴート人がその原郷とされるスカンジナビア半島南部から移住した先の黒海北岸のことで、黒海北岸の地が肥沃で、人口希薄であったことをまず述べているのであり、それゆえ、南方、すなわちローマ帝国へと彼らをさらに向かわせたのは、何かが不足していたからではなく、その若いエネルギーと冒険心であったとアルフェルディは主張しているのである。アルフェルディ自身は、ドイツ人ではなく、ハンガリー人であったのだが、この説明には、ゲルマン民族に対する一種のロマンティシズムを感じさせる。いずれにしても、アルフェルディの基本的な見方は明確であろう。すなわち、ゴート人は、スカンジナビアから黒海北岸へ移動し、その余勢を駆る形でローマ帝国に侵入したのである。

同様の見方は、わが国でも、増田四郎氏の研究に見ることができる。氏は、『ゲルマン民族の国家と経済』の中の「民族大移動期の王権伸長」と題された一章の中で、東ゴート人の歴史を5期に分け、まず紀元後150年頃から248年頃までを第1期とし、この時期にゴート人がバルト海南岸から黒海北岸へと移動したと見ている。そして続く3世紀を第2期、正確には248年頃から375年までを第2期とし、「この期の波状侵攻は、・・・移民のためのものではなく、戦争、掠奪、商業を兼ね、やがては本拠へ引き上げるといふ当座の性格の行為であった」と述べて⁴⁾、やはりゴート人の移住とその後の略奪という図式を取っている。近年のゲルマン民族研究の最新の動向を踏まえて書かれた足立広明氏の論考でも、3世紀のゴ-

ト人の侵攻の性格については、増田氏とほぼ同様の見解が示されている。足立氏は、ゴート人のスカンジナビア起源には慎重であるが、彼らのバルト海南岸から黒海北岸への移動はおおむね肯定した上で、3世紀のゴート人の侵攻について、「略奪の到達範囲だけでみると、のちの東西ゴートをもしのいでいた」とし、「ただ、ローマ側にとって救いとなったのは、このときの襲撃は略奪が目的であったことで、デキウスを敗死させてもそこに居座る気配がなかった」と論じる⁵⁾。ここでも、3世紀のゴート人の侵入は、移住の後に起こった略奪目的の行為であったとみなされている。

同様の傾向を持つ研究として、最後に、P・ヘザーの研究を挙げておきたい。ヘザーは、1991年の『ゴート人とローマ人—332年から489年』以後、民族移動期のゲルマン民族とローマ帝国の関係についての書物を次々と著し、今やこの種の問題の第一人者となっている研究者であるが、ここでは2010年に刊行されたヘザーの最新刊『帝国と蛮族』に見られる彼の見方を紹介しておこう⁶⁾。この書物の中で、ヘザーは、まず考古学や文献学の史料に基づきながら、3世紀にゴート人がバルト海南岸から黒海北岸へ民族移動を行ったことを強く主張している。それは、字義通り、女子供を伴った民族移動であり、その原因をローマ帝国、あるいはその国境地帯の富に引き付けられたものであったとしている。ただし、それは文献史料に描かれるような一人の王に率いられて一つの民族がまとまって移動したのではなく、様々な規模の集団が、ばらばらに経済的理由から自発的に南方へと移動したと考えている。そして、その結果、ドン川からカルパチア山脈に至るまでの地域に新たにゴート人の勢力圏が出現したとするのである。そして、ローマ帝国内へのゴート人の侵入をこの延長線上に捉えている。すなわち、彼らのローマ帝国への侵入も、これまでの移住と同じく、ローマ帝国の富の獲得を目指した行動であった、とするのである。

さて、ここまでアルフェルディ以後の代表的な研究を見てきたが、アルフェルディ以後のゴート人の侵入についての基本的な見方は、それほど変わっていないと言えるだろう。すなわち、ゴート人のスカンジナビア起源は否定されつつあるものの、少なくとも彼らはバルト海南岸から黒海北岸まで民族移動を行い、黒海北岸に定着、そしてその余勢を駆るような形で、掠奪のためローマ帝国へ侵入したというのである。

一方で、このような通説とは大きく異なるゴート人についての見方が、2007年にM・クリコウスキーによって提示された。クリコウスキー説の結論だけを述べれば、ゴート人は、スカンジナビア半島はもちろんのこと、バルト海沿岸からの移住民ですらなく、フランク人やアラマンニ人などと同様、3世紀において黒海北岸で新たに形成された集団だということになる。クリコウスキーは、ゴート人の形成過程を具体的に次のように考えている。3世紀に黒海北西の地域で、その地の多様な住民の戦士層（the warrior stratum of a heterogeneous population）が、帝国の混乱に乗じて略奪を行い、利益を得るため結集した。同世紀の終わりには、これらの戦士層の一部が、ドナウ川北岸から黒海北岸までの地の政治的支配権を握るようになる。戦士の中に、ローマ人によってゴート人と認識されている者があり、おそら

く自身もゴート人と自覚していた。そして、時間と共に、彼らがゴート人であることが誰の目から見ても疑問の余地がなくなった、とするのである⁷⁾。通説の語ってきた民族移動が明確に否定され、侵入の目的は同じく略奪とされるものの、その動因も民族移動の余波ではなくなり、帝国の混乱に乗じたものとされている。非常に興味深い仮説であるが、本書は全体的に実証的な記述とはなっておらず、なぜ戦士の一部がゴート人とローマ人によって呼ばれたのかなど説明されていない部分も多くあり、疑問は残る。

本稿では、これらの先行研究に留意しつつ、3世紀のゴート人の侵入について考えていくが、具体的な検討に入る前に、この問題に関する史料について簡単に説明しておきたい。

2. ゴート人侵入についての史料

3世紀のゴート人の侵入については、アテナイの人で、自らもゴート人との戦いに加わったと伝えられるデクシッポスが、最も詳細で正確な情報を残したと考えられるが⁸⁾、残念なことに、その記録である『年代記』も『スキュティカ（ゴート戦争史）』も共に、僅かの断片を除いて失われてしまっている⁹⁾。したがって、デクシッポスに由来する情報を何らかの形で反映した史料が、3世紀のゴート人侵入についての一等史料ということになる。そして、それに当たるのが、ビザンツ時代にギリシア語で著されたゾシモスとシュンケロス、そしてゾナラスの史書である。それぞれ5世紀、8世紀、12世紀に成立したものであるが、これらの史書からは比較的に詳細な3世紀のゴート人の侵入についての情報を得ることができる。特にシュンケロスについては、19世紀にゴート人の侵入についての古典的な研究を行ったB・ラッパポルトが250年代から260年代のゴート人侵入についての「最良の史料」と呼んでいる¹⁰⁾。ラテン語で著された『ローマ皇帝群像』にも、デクシッポスを利用したゴート人侵入の記事が見られるが、『ローマ皇帝群像』はデクシッポスの情報を、この伝記集で悪帝とされるガリエヌスの評価を貶めるために恣意的に操作しており、利用に際しては注意が必要である¹¹⁾。

一方、デクシッポスとは異なる伝承を伝える史料としてヨルダネスの『ゴート史』を挙げることができる。ヨルダネスはゴート系の人で、6世紀にコンスタンティノープルで活躍していた¹²⁾。ヨルダネスは、自らの『ゴート史』を著すに際しては、東ゴートのテオドリク大王に仕えたカッシオドルスの『ゴート史』を利用したと書いている¹³⁾。しかし、カッシオドルスの『ゴート史』は全く残っておらず、ヨルダネスの作品との関係性は研究史上、議論の対象となっている¹⁴⁾。

これらの他にも、アウレリウス・ウィクトルやエウトロピウスなどの4世紀に成立したラテン語の史書もゴート人の侵入について伝えているが、情報量は貧弱である。

以上に紹介した史料に記録されているゴート人侵入の情報は、「史料に見る「ゴート人」の侵入」として一覧表にして纏めてある（表1）。

表1 史料にみる「ゴート人」の侵入

バルビヌス とアビエヌ スの治世 (238年)	ゾシモス	シュンケロス	ゾナラス	【ローマ皇帝群像】 スキュティア人、ヒストリア ア市を攻撃。スキュティア 人との戦争開始 (Max. et Bal.,16)。	ヨルダネス	アウレリウス・ウィクトル	エウトロピウス
ゴルディア ヌス3世の 治世 (238-244年)				スキュティア人の王アル グントウス、ティメシテウ スの死を知り、近隣の諸王 国を荒らす (Gor.,31)。			
フリリッ プスの治世 (242-249年)			フリリッブス、スキュ ティア人(カルピ人?) に遠征後、ローマに帰 還 (12.19)。				
246年					フリリッブス、ゴート人への 年金支払い停止(89)。オスト ロゴタ王、モエシア、トラキ アを荒らす。デキウス、フィ リッブスによって派遣され る (90)。		
248年					アルガイトウスとダンテリ クス、3万の軍勢でモエシア に侵入。タイファリ、アスト リンギ、カルピ、ペウキが同 道。モエシアに入り、マルキ アノポリスを包囲。長期の包 囲の後、住民から金をとって 引き上げる (91-94)。		
デキウスの 治世 (249-251年)			「蛮族」、ボスポロスを 荒らす (12.20)。				
250年	スキュティア人、トラキア 周辺を荒らす(1.23.1)。フィ リッポボポリス陥落 (1.24.2)。	ゴート人と呼ばれるス キュティア人、ドナウ川 を渡り、ローマ領に侵入。 ニコポリスを攻撃。デ キウス、3万人の敵を殺 害。フリリッポポリス陥 落。多くのトラキア人殺 される (705)。			クニウァ、7万の軍を率いて、 モエシアに侵入。ノウアエを 攻撃するも、ガルスに撃退。 ニコポリスを攻撃。デキウス をペロエアで破り、フィリッ ポポリスを占領。フリリッポ ポリスの司令官プリスクス、 ゴート人と結ぶ (101-103)。	ゴート人、トラキアを 荒らす。マケドニア 総督プリスクス襲奪 (29)。	

251 年	ガルス、「蜚族」と結託して、デキウスを殺害 (1.23.3)。	デキウス、アブリットスで戦死 (705)。	ガルス、「蜚族」と結託して、デキウスを殺害 (1.220)。		デキウス、アブリットスで戦死 (103)。	デキウス、「蜚族」をドナウ川を越えて追撃中に、アブリットスで戦死 (29)。	デキウス、「蜚族」をドナウ川を越えて追撃中に、アブリットスで戦死 (94)。
ガルスの治世 (251-253 年)	ガルス、「蜚族」に戦利品と年金を与え、帰還を許す (1.25.1)。スキュティア人、地中海に到るまでの全ての属州を荒らす (1.26.1)。ゴート、ボラニ、ウルグンディ、カルビ、ヨーロッパの諸都市を略奪 (1.27.1)。	スキュティア人、捕虜と戦利品と共に帰還 (705)。	ガルス、「蜚族」に年金を約束。スキュティア人、大軍でイタリヤとマケドニア、テッサリア、ギリシアに侵入。一部は、ボスボロス、マエオティス湖を越え、黒海に到達し、多くの土地を荒らす (1.22.1)。		ゴート人、モエシアをしばしば荒らす (103)。		
253 年	スキュティア人、小アジアに侵入し、カッパドキア、ベッシヌス、エフェソスまで荒らす。パンノニア軍の司令官アエミリアヌス、彼らを撃退しただけでなく、敵地まで侵攻し勝利。このため皇帝に推戴される (1.28.1)。		スキュティア人、年金の額に不満を言い、ローマ側を脅迫。モエシアの軍の司令官アエミリアヌス、スキュティア人を破り、皇帝に (1.22.1)。		アエミリアヌス、モエシアの支配権を掌握した後、ゴート人の略奪をまねて諸都市を略奪 (105)。		
ウァレリアヌスの治世 (253-260 年)	スキュティア人とマルコマンニ人、テッサロニカを包囲。ギリシア本土パニツク (1.29.2)。ボラニ、ゴート、カルビ、ウルグンディ、イタリヤとイリュリウムを荒らす (1.31.1)。	スキュティア人、トラキアに侵入し、テッサロニカを包囲。ギリシア本土はパニツクに。戦利品と共に故国に帰還 (715)。	スキュティア人、トラキアに侵入し、テッサロニカを包囲。ギリシア本土パニツクに (1.22.3)。	スキュティア人、トラキアを占領し、マケドニアを破壊。テッサロニカを包囲 (Gal.5)。			
254 年 ?	スキュティア人 (= ボラニ人?)、黒海東岸のピトウスを攻撃するも、スツッケシアヌスにより撃退される (1.32.1)。						
256 年 ?	スキュティア人 (= ボラニ人?)、ピトウスを再度攻撃、トラベズスを占領。戦利品と共に帰還 (1.32.1-3)。						

257/8 年	近隣のスキュティア人 (= ゴート人?)、ボラニ人の戦利品に刺激を受けて、海路、小アジアに侵入。カルケドン、ニコメデシア、ニカエス、キオス、アパメイア、ブルサを占領。キュジクスの手前で帰還 (1.34-35)。			スキュティア人、ビテュニアに侵攻し、ニコメデシアを焼く (Gal.4)。				
259 年	スキュティアの諸部族、イリュリウムとイタリアに侵入。一部はローマまで侵攻 (1.37.1)。							
ガリエヌスの治世 (260-268 年)			ガリエヌス、ヘルリ人と戦う。ヘルリ人とはスキュティア・ゴート人のことである (12.24)。				ゴート人、トラキアに侵入。マケドニア、アカイア、アジアの一部を占領 (33)。	ギリシア、マケドニア、ポントウス、アジア、ゴート人に荒らされる (9.8)。
262 年	彼らの言葉でゴート人と呼ばれるスキュティア人、黒海を渡り、ビテュニア、全アジア、リュディアを攻撃。イオニアの諸都市も攻撃。			ゴート人の一部であるスキュティア人、アジアを荒らし、エフェソスのアルテミス神殿を焼く (Gal.6)。		ゴート人、レスバ、ウェドゥクス、タルアルスを指導者にして、エフェソスのアルテミス神殿を焼く。カルケドンを破壊。トロイアも攻撃し、戦利品と共に帰還。後、トラキアのアンキアリスを攻撃 (107-109)。		
267 年	彼らの言葉でゴート人と呼ばれるスキュティア人、フリュギア、トロイア、カッパドキア、ガラティアも攻撃。オダエナトウスの出撃を知り、帰還 (716)。			スキュティア人、カッパドキアに侵入し、ビテュニアに向かう (Gal.11)。ヘラクレアに到達するが、帰還 (Gal.12)。				

268 年	スキュティア人、ギリシアに侵入し、アテナイを占領。ガリエスス親征(1.39.1)。アウレオルス北イタリアで反乱。マルキアヌス、スキュティア人の戦争指揮を委ねられる (1.40.1)。	ヘルリ人、500 隻の船で、マエオティス湖から黒海を渡り、ビザンティウム、クリュンポリス、キュジクスを攻撃。レムノス島、スキュロス島攻撃。アテナイカにも侵入し、パルタ、アルゴス、アカイアの各地を荒らす。ガリエススの攻撃を受け、ネストスで 3000 人殺害される。ヘルリの王ナウロバトウス降伏 (717)。	「蛮族」が、マエオティス湖を渡り、ヨーロッパとアジアに侵入。アテナイを占領。アテナイ人クレオダモス、海上から攻撃し、多くの敵を殺害。クラウディウス、海陸で敵に勝利 (12.26)。	スキュティア人、黒海を渡り、侵略。ビザンティウム近くで海戦。クレオダモスとアテナエウスの防戦。ローマ側のウェネリアヌス、海戦でゴート人を破るも、戦死。アカイアも荒らす。デクシッポスによって撃退。エピルスを通って撤退、マケドニアとモエシアを徘徊。ガリエススによっても破られる (Gal.13)。			クラウディウス、自らの命を掛けて、ゴート人を撃退 (34)。	クラウディウス、イリュリウムとマケドニアを荒らしていたゴート人に勝利 (9.11)。	
269 年	スキュティア人、前回の侵入に刺激され、ヘルリ、ベウキ、ゴートと共に、総数 32 万人、6 千隻の船で侵入。トミ、マルキアノポリス、キュジクスを攻撃。アトスで船を修理。カッサンドラ、テサロニカを包囲。ドベロス、ペラゴニアへ進み、この辺りで皇帝の軍と会戦。スキュティア人の残りは海路テッサリアとギリシアへ侵入。クラウディウスにナイッススで敗れ、マケドニアのハエムス山中に籠るも飢えと病で壊滅。クレタとロードスも略奪される (1.42-46)。	アウレリアヌス、スキュティア人に対する遠征 (721)。	アウレリアヌス、スキュティア人に対する遠征途上で、暗殺される (12.27)。	アウレリアヌス、ドナウ川を渡り、ゴート人の将軍カンナバス、あるいはカンナバデウスをその 5 千の兵と共に破る (Aurel.22)。				アウレリアヌス、ゴート人に大勝する (9.13)。	

3. ゴート人の侵入—その歴史的経過—

ゴート人が最初にローマ帝国への本格的な攻撃を加えたのは、バルビヌスとブピエヌスが皇帝であった238年¹⁵⁾のことであった¹⁶⁾。この時、ゴート人は、ドナウ川の河口にあったヒストリア市を攻撃したのであるが、このヒストリア市の攻撃については『ローマ皇帝群像』が、デクシッポスに言及しつつ、次のように記している。「スキュティア人に対する戦争も始まり、当時、ヒストリア、あるいはデクシッポスの言うところでは、イストロスの町が破壊された」と¹⁷⁾。ここで言われているスキュティア人というのが、黒海北岸に住んだゴート人のことを指すと一般的に考えられており、デクシッポスは、新来のゴート人をヘロドトス以来の古典的な表現でスキュティア人と言い表したのだとされているのである。また『ローマ皇帝群像』の一文からは、デクシッポスは、この年をもってゴート人との戦争が始まった年と捉えていたことが分かる。この238年の侵入事件に対処したのは、下モエシア総督であり、「238年の事件」に際してはアクイレシアをマクシミヌス帝の攻撃から守ったトリウス・メノフィルスであった。メノフィルスは、年金の支払うことで、ゴート人を退去させた¹⁸⁾。

しかし、ゴート人の活動は止まらなかったようである。同じく『ローマ皇帝群像』には、「スキュティア人の王アルグントが、近隣の人々の諸王国を荒らした。これはとくに、その洞察力で国家を動かしていたミシテウスが死んだと知ったからである」とある¹⁹⁾。ミシテウスというのは、ゴルディアヌス3世（在位238-244年）の岳父であり、近衛長官でもあった人物で、正しくはティメシテウス（C.Furius Sabinus Aquila Timesitheus）と言うが、この人物は243年に没しているので、ゴート人が「近隣の人々の諸王国」を荒らしたのは、この年代の後ということになる。ただし、「近隣の人々の諸王国」が具体的に何を指しているのかは判然とせず、またアルグントは、後段で言及するフィリッパス帝治下でローマに侵入したゴート人の指導者アルガイトゥスとグンテリクスの名からねつ造された名に過ぎないとして、この記述の信憑性を疑う説もあり²⁰⁾、アルグントの侵入については問題が多い。ゴルディアヌス3世は、244年にササン朝ペルシアと会戦し、敗北するが、ゴルディアヌス3世が率いていた軍に、ゴート人が含まれていたことが『神君シャープール業績録』から知られている²¹⁾。この業績録には、ゴルディアヌス3世が「ゴート（Gouththoi）とゲルマン（Germanoi）の民族（ethnos）から軍勢を徴募し」、ペルシアへの遠征を行ったとの記述がある。当時、ゴート人がローマ帝国から年金を受け取っていたこと自体は、それが先に言及したメノフィルスの対応の結果であったかどうかは断定できないにせよ、ペトロス・パトリキオスの証言から疑いなく²²⁾、このことを勘案するならば、ゴート人はゴルディアヌス3世の治世には既にローマ帝国との間で年金と引き換えに軍事援助を行う条約を結んでいた可能性が高いだろう。

ゴルディアヌス3世の後を継いだフィリッパスは、ヨルダネスによれば²³⁾、ゴート人への年金の支払いを停止し、このためゴート人のローマ帝国への侵入が再開したとされている。

ヨルダネスは、二度のゴート人の侵攻を記録している²⁴⁾。一度目はオストロゴタ王がモエシアとトラキアを荒らし²⁵⁾、二度目は、3万のゴート人がアルガイトゥスとグンテリクスを指導者にして、タイファリ、アストリンギ、カルピ、ペウキニ²⁶⁾の部族らと共に侵攻、マルキアノポリスを包囲したとしている²⁷⁾。しかし、彼らはマルキアノポリスを落とすことはできず、金を取って引き上げた。アルフェルディは、一度目の侵入を246年、二度目の侵入を248年の出来事としているが、ヨルダネスとは異なり、一度目の侵入の結果として年金の支払いが停止されたとの見方を示している²⁸⁾。フィリップスは二度目のゴート人の侵入に対応するためにデキウスを派遣したが、事態をうまく処理したデキウスは、その地の軍の支持を得て、皇帝を称し、フィリップスを倒した。

デキウス治世の250年には、ゴート人は今度はクニウァを指導者にローマ領に侵攻した。ヨルダネスによれば²⁹⁾、クニウァは軍を二手に分け、一手はトラキアのフィリップポリスに進ませ³⁰⁾、自身は7万の軍勢を率いてオエスクス近郊でドナウ川を渡り、東進してノウァエを攻撃したが、この都市の守備に当たっていた下モエシア属州総督トレボニアヌス・ガルスによって撃退された。クニウァは方向を転じ、ニコポリスに攻撃を加えた。ここで皇帝デキウスが到着し、戦闘となり、デキウスが勝利し、3万人を超えるゴート人を倒したとされている。敗れたクニウァは、ハエムス山脈を越え、トラキアのフィリップポリスを攻囲していたもう一手の軍と合流しようとした。これを追撃したデキウスは、逆にハエムス山脈を越えた所にあるペロエアで、クニウァの軍に急襲され敗れることになった。デキウスは、オエスクスまで一旦、撤退した。一方、クニウァは、フィリップポリスの包囲軍と合流した。フィリップポリスは当時、T. ユリウス・プリスクスが守備に当たっていたが、事態に絶望したプリスクスは、皇帝を称した上、ゴート人と結んで、城門を開いた(250年の末)³¹⁾。しかし、クニウァはフィリップポリスを略奪し、プリスクスの消息も史料から途絶える。250年の冬をトラキアで過ごしたクニウァは、翌251年には戦利品や捕虜と共にドナウの北岸に戻るべく、移動を開始した。デキウスは、これを追撃する作戦に出るが、アブリッスで再びクニウァに敗れ、同僚皇帝となっていた息子のヘレンニウス・デキウスと共に遂に命を落とした(6月)。

デキウスの戦死後、ガルスが皇帝となったが、ガルスはクニウァと講和を結び、年金を与える約束をした上、戦利品や人質と共に故国に戻ることをクニウァに認めた。

クニウァは帰還したものの、ガルスの治世にゴート人の侵入は止むことはなかった。ゾシモスは、ゴート、ボランニ、ウルグンディ、カルピ³²⁾らの諸族がヨーロッパの諸都市を荒らしたと伝えている³³⁾。また、ゴート人が、小アジアにも侵入し、ペッシヌスやエフェソスが荒らされたとも言っている³⁴⁾。ゾナラスによれば、ゴート人は、年金額に不満を言い立て、ローマ側を脅迫したが、これを下モエシア属州総督であったアエミリアヌスが拒否し、逆に攻撃を加え、勝利を挙げた³⁵⁾。その結果、アエミリアヌスは、軍によって皇帝に推戴されている。アエミリアヌスはガルスを倒すが、ガルスが自らの救援に呼んでいたヴァレリ

アヌスも皇帝を称し、アエミリアヌスはヴァレリアヌスに敗れた。ヴァレリアヌスは、即位後、息子のガリエヌスを同僚皇帝とし、共同統治を始める。このヴァレリアヌスとガリエヌスの治世にも、ゴート人の侵入は続いた。

両者の共同統治期の254年にゴート人はまたもトラキアへ侵入し、テサロニカを包囲した³⁶⁾。この事態は、ギリシア本土をパニックに陥れ、アテナイでは、スラの時代から放置されていた城壁が再建された、とゾシモス、ゾナラス、シュンケロスが一致して伝えている³⁷⁾。しかし、これを最後にゴート人の攻撃ルートは、陸路、バルカン半島を襲うのではなく、海路で黒海を渡って小アジアを襲撃する方向に変わることになる。攻撃の主体も、これまでの西方の「ドナウ川のゴート人」と区別される「黒海のゴート人」と呼ばれるグループに代わる³⁸⁾。これには、クニウァの死が関わっていたことが推定されている³⁹⁾。

同じ254年にゴート人とボランニ人⁴⁰⁾が黒海東岸のピトゥスを攻撃するも撃退されたが、翌年には彼らはピトゥスの征服に成功し、さらに小アジアを攻撃し、トラベズなどを略奪した⁴¹⁾。この成功を受けて、ゴート人は、257/8年にはさらに大規模な遠征を企てた。彼らは、略奪済みの黒海東岸ではなく、西岸に沿って進み、カルケドンを占領するに至った。さらにニコメディアも占領したゴート人は、ニカエア、キオス、アパメイア、プルサをも攻略し、キュジコスの手前で「荷車と船に戦利品を載せて、故国への帰還を考えた」とされている⁴²⁾。

ヴァレリアヌスは、260年にペルシアの捕虜となり姿を消し、以後、ガリエヌスの単独統治が始まる。その262年に、ゴート人は、レスパ、ウェドゥクス、タルアルスを指導者に、またも黒海を渡り、小アジアを攻撃した。カルケドンやイオニア地方の諸都市が襲撃され、有名なエフェソスのアルテミス神殿が焼失した。彼らは、往路と同じ道を通して、帰還したとされている⁴³⁾。267年に、ゴート人は、今度は小アジアの東部に侵入した。ヘラクレア・ポンティカを征服し、ビテュニア、ガラティア、さらにはカッパドキアまで侵入したが、パルミラのオダエナトゥスの出撃を知ると、「彼が来る前にポントスを通して故国に帰った」とされている⁴⁴⁾。なお、これらの262年と267年の侵入事件について、A・アルフェルディは、別の年に起こったのではなく、共に267年に起こった出来事としているが⁴⁵⁾、ここではM・サラモンとA・シュヴァルツの復元に従う⁴⁶⁾。

ガリエヌス治世末年の268年には、3世紀を通じて最大規模のゴート人の侵入が起こった。この侵入については、出来事の経過の復元が研究者によって大きく異なるが、まずかつての通説であったアルフェルディによる復元を見てみよう⁴⁷⁾。

アルフェルディによれば、今回の侵入は海陸の両路によるものであった。ドニエステル川の河口からは、500隻とも2000隻とも伝えられる船団が出帆し、陸路では32万人と伝えられる膨大な軍勢が進んだ。船団に乗ったのは主にヘルリ人で、陸路を進んだのはゴート人であった。船団は、クリュソポリスやビザンティウムを攻撃したが、マルマラ海で難破し、ローマ側の海軍にも攻撃された。陸路を進んだ者たちは、ギリシア本土にまで侵攻し、アテ

ナイヤスパルタまで攻撃した。アテナイでは、デクシッポスが抗戦の指導者となり、彼らを撃退した。撃退されたゴート人は、ポイオティア、エピルス、マケドニアを通して帰還しようとした。一方、船団の一部は、ダーダネルス海峡を越えて、アトスで船を修理し、カッサンドラやテッサロニカを攻囲した。彼らに対してはガリエヌスが向かい、ナイッススで大規模な会戦となり、5万人の敵が殺され、ヘルリ人の王ナウロバトスが降伏した。ガリエヌスは、優勢に侵入者と戦いつつあったが、北イタリアで部下のアウレオルスが反乱を起こしたため、戦争の指揮をマルキアヌスに委ねて、バルカン半島の戦場を離れた。ガリエヌスは、その後、アウレオルスをミラノに包囲中に暗殺され、代わって即位したクラウディウスがゴート戦争に親征する。クラウディウスは、マケドニア方面に逃れつつあった敵を二度にわたって破った。269年には海陸から再び新手の軍勢が侵入するも、クラウディウスは、これらの敵も撃破したのであった。

続いて、同じ268年の侵入事件について、ヴォルフラム⁴⁸⁾、そしてこの説に基本的に従うヘザー⁴⁹⁾の復元を紹介する。両者によれば、大船団は黒海北岸から黒海西岸のトミヤマルキアノポリスを攻撃しつつ南下、キュジクス、ビザンティウムも攻撃し、船団はダーダネルス海峡を突破した。その後、この船団は三つのグループに分かれ、第一グループは、テッサロニカの辺りに上陸。なお、このグループは主にヘルリ人から構成されていた。第二グループは、ヘルリ人とゴート人の混成で⁵⁰⁾、アッティカ地方を攻撃。そして、第三グループは、レスパ、ウェドックス、タルアルスがこれを率い、ロードス島やキュプロス島を攻撃、さらに小アジア西部に向かい、エフェソスのアルテミス神殿を焼くなどした。最終的に、第一グループは、268年にガリエヌスによってネストス川で破られ、第二グループは269年にナイッススでクラウディウスに壊滅させられたのである。そして、第三グループは、黒海北岸に戻ったとされる。

アルフェルディとヴォルフラム、ヘザーという、代表的な学者の説を見たが、ずいぶん異なることは明白であろう。細かな点は除いても、まずアルフェルディは、陸路と海路に分かれて敵は侵入したことになるが、ヴォルフラム、ヘザーの説では海路のみであった。またアルフェルディは、ガリエヌスがナイッススでヘルリ人に勝利したとしていたが、ヴォルフラム、ヘザーはナイッススでの勝利はクラウディウスによるものとし、新たにネストス川という地名が挙げられ、こちらでガリエヌスが勝利したことになるのである。またヘザーは、小アジア攻撃に向かったのは、レスparaであったとし、エフェソスのアルテミス神殿の焼失は、この時のこととしていたが、アルフェルディは262年の出来事としていた。さらにヘザーとヴォルフラムは、269年の追加の侵入については言及していない。

最後にもう一つ、今日、新たに通説となりつつあるように見受けられる説を挙げておく。それはT・コトゥーラとE・ケッテンホーフェンによって別個に提示されたものであるが⁵¹⁾、彼らの説をA・ゴルツが要約している⁵²⁾。ゴルツの要約に従えば、まず267年にヘルリ人による海路での侵攻が起った。彼らの船団は、アゾフ海の辺りから出発し、ビザンティウムや

クリュソポリスを占領、ビテュニア地方の海岸部を荒らし、マルマラ海を越えて、エーゲ海に突入。ヘルリ人はアッティカに上陸し、アテナイ、スパルタが攻撃するが、デクシッポスらに撃退され、陸路でエピルス、マケドニアを通してトラキア方面へ撤退を開始する。しかし、268年初頭に、救援に現れたガリエヌスによって攻撃され、ネストス川の辺りで大敗した。269年には、今度は、ヘルリ人やゴート人による大規模な侵入が起こった。総数32万人が6000隻の船に乗り込んだとされている。彼らは、ティラ川河口から出航し、黒海西岸を南下、マルマラ海で難破するも、何とかダーダネルス海峡を越えてエーゲ海に入った。船団の一部は、アトス山の辺りで上陸し、カッサンドラとテッサロニカを包囲するなどするが、ナイッスでクラウディウスの軍に決定的な打撃を与えられた。残党は、結局、疫病と飢えで壊滅した。もう一部の船団は、クレタやロードスまで攻撃したが、最終的にテナギノ・プロブスによって掃討された。

ゴルツらの説の要点は、ガリエヌスからクラウディウス治世にかけて、二度の大規模な侵入があったこと、それぞれをガリエヌスとクラウディウスがネストス川とナイッスで大勝利を挙げて、食い止めたことである。アルフェルディは、二度の侵入を一度と見、ネストス川とナイッスも同一事件が誤って二つの戦いとして伝えられたとしていたのであり、この見方が今、修正されつつあるのである。

いずれにしても、クラウディウスは、ローマ皇帝として初めて「ゴート人に対する大勝利者 Gothicus Maximus」の称号を得た。このクラウディウスに続いたアウレリアヌスの治世にも、ゴート人の侵入は続いた。アウレリアヌスは、これに対抗して、272年にはドナウ川を渡り、カンナバス、あるいはカンナバデウスという名のゴート人の王を、その5万の兵力共々打ち破ったとされている⁵³⁾。そして、長らく続いたゴート人の侵攻も、アウレリアヌスの治世を持って小康状態になった⁵⁴⁾。続くタキトゥスの治世にもゴート人が小アジアに侵入したことは疑いないが⁵⁵⁾、4世紀の歴史家アンミアヌス・マルケリヌスは、ゴート人は、アウレリアヌスによって撃退されて以後、「長い間、動かず、静かになった」と記述している⁵⁶⁾。

4. ゴート人の形成と侵入

以上、長々とゴート人の侵入の経緯について見てきたが、ここからどのようなことが言えるのだろうか。結論を先取りすれば、通説を肯定できる部分とこれを否定する、あるいは疑義を抱かせる部分があった。まず、通説を肯定できる部分について確認しておこう。

それはゴート人の侵入の目的についてである。諸説は一致してゴート人の侵入を略奪目的としていた。この点については疑いないように思われる。フィリップスの時代のアルガイトゥスとグンテリクスは、フィリップポリスを包囲したが、金銭を住民から受け取って引き上げたのであり、デキウスを敗死させたクニウァも、一冬をローマ領内で過ごす、やはり帰還を試み、その過程でデキウスを破り、ガルスから戦利品と年金の約束を得て引き上げて

いる。257年に海路小アジアを襲った際も、ゴート人は「荷車と船に戦利品を載せて、故国への帰還を考えた」とされていた。267年の時も、彼らははっきりと「故国に帰った」と記述されていた。クラウディウス帝時代の侵入については、これが土地を求めての民族移動であったとする見解がかつてラッパボルトによって唱えられていたが⁵⁷⁾、現在は否定されている。

小アジアへ侵入したゴート人が、もっぱら略奪を主目的としていたことを伝える興味深い史料が残っている。それは、タウマトゥルグスのグレゴリウスの書簡である⁵⁸⁾。グレゴリウスは、250年代に小アジアのポントス地方に位置するネオカエサレアの司教だった人物であるが、その書簡は、ゴート人やボラニ人の侵入を受けて混乱する社会の中で起こった不祥事について、どのように対処すべきかを近隣の司教グレゴリウスが答えるという内容のものとなっている。例えば、ゴート人やボラニ人が打ち捨てて行った財貨を横取りした者をどう扱うべきか、あるいは彼らの仲間に入り、隣人に害を為した者はどうされるべきなのか、といったことが事例として挙げられ、その対応が記されている。この書簡を読んでも、やはりゴート人やボラニ人が土地を奪ったというような記述はなく、全て人、あるいは財貨の略奪に伴って発生する事件ばかりが挙げられている。

このようにゴート人の侵入の目的は、確かに通説が主張してきたように、掠奪であったことは疑いなく思われる。

一方で、通説への懐疑も同時に生まれてくることになった。一つは、ゴート中心史観ともいべき見方への懐疑である。先に紹介した侵入の事例はいずれも研究史の上で、「ゴート人」の侵入とみなされているものであり、私自身も便宜上、「ゴート人」の侵入として扱ってきた。しかし、史料に即してより子細に侵入の主体をしてみるならば、必ずしもそれがゴート人とは断言できない、またはゴート人は侵入者の一部に過ぎない事例がしばしば見受けられた。

例えば、ガリエヌス帝治世の末年の267/268年に起こった侵入事件について、アルフェルディヤヴォルフラム、ヘザーらは、ゴート人とヘルリ人によるものと論じていた。確かにゾシモスと『ローマ皇帝群像』は、「スキュティア人」がこの時に侵入したとしており、スキュティア人＝ゴート人とするならば、確かにゴート人がこの侵入の中心であったように見える。一方で、シュンケロスは、267/8年の侵入をヘルリ人の侵入としてのみ描いている⁵⁹⁾。シュンケロスによれば、ヘルリ人は500隻の船に乗り込み、アゾフ湖を渡り、黒海を通して、ビザンティウム、クリュソポリスを占領。さらにアッティカに侵入し、アテナイやコリントス、スパルタなどを放火、破壊した。しかし、救援に駆け付けたガリエヌスの軍とネストス川で戦い、3000人が殺され、ヘルリ人の王ナウロパトゥスが降伏したと伝えているのである。アルフェルディとヘザーは、ゾシモスとシュンケロスの情報を折衷した形で、特にアルフェルディは海路をヘルリ人、陸路をゴート人と巧妙に分けて解釈し、267/8年の侵入をゴート人とヘルリ人によものとみなしているのである。しかし、以下でも示すようにスキュティア

人という表現は、必ずしもゴート人のみを指しているわけではなく、シュンケロスは、ゴート人を特に指す場合は「ゴート人と呼ばれるスキュティア人」という表現をしていることは注目すべきであろう⁶⁰⁾。また奇妙なことにこの3世紀最大とされるゴート人の侵入についてヨルダネスが言及していないことを考え併せるならば、267/8年の侵入は、ゴート人による侵入とは断言できないように思われるのである。ちなみに、ヨルダネスは、フィリップス、デキウス、ガルス、アエミリアヌスの治世、そして262年にゴート人の侵入があったことを伝えており、シュンケロスは、デキウス治世と262年の侵入のみを「ゴート人と呼ばれるスキュティア人」と記録していることは、興味深い。

また、ヘザー、ヴォルフラムはこれについては言及しないのだが、アルフェルディヤゴルツらがクラウディウス時代の269年に到来したとする新たな軍勢について、ゾシモスは、「スキュティア人の残りの者たちが、ヘルリ、ペウキ、ゴートを伴って」来たと記述している⁶¹⁾。この個所は、スキュティア人＝ゴート人との解釈が明らかに通用しないことを示す個所でもあるが、同時にゴート人がこの時の侵入者の一部に過ぎなかったことを示している。一方、シュンケロスは、269年の侵入もヘルリ人のみの侵入として言及していることは留意しておきたい。この戦いに勝利したクラウディウスは、「ゴート人に対する大勝利者」と呼ばれることになるので、一見すると、この時の侵入の主体はゴート人であったと考えられるようにも思われるが⁶²⁾、シュンケロスがこれをヘルリ人として言及しており、またヨルダネスも言及していないことを勘案するならば、私自身は、むしろ、ゾシモスとの整合性から判断して、3世紀においてラテン語の「ゴート人」という言葉は、ギリシア語のスキュティア人と同じく、漠然と黒海北岸に住んでいた諸民族のことを指していたのではないかと、考えたい。先に言及した『神君シャープール業績録』には、「ゴートとゲルマンの民族」という表現が見られたが、この史料に見られる「ゴート」もギリシア語で表記されているとはいえ、おそらくはラテン語の用法で、民族名としてのゴート人ではなく、黒海北岸に住んだゲルマン系の民族の総称ではなかったか。「ゴート」が東方のゲルマン人であるとするならば、「ゲルマン」は西方のゲルマン人を示し、「ゴートとゲルマン」で対になった表現になっているのであろう。おそらく、ゴート人という言葉が、ラテン語で、厳密に後の東西ゴート王国を建設する集団に用いられるようになるのは、5世紀のことではないかと思われる。

話が途中で少し脇にずれたが、以上のように、ガリエヌス帝末年からクラウディウス帝治世に起こった最大規模とされるゴート人の侵入は、実はその主体がゴート人ではなかった、あるいはゴート人はその一部に過ぎなかったと考えられるのである。繰り返しになるが、ヨルダネスは、このゴート人最大の侵入事件とされるものについて全く言及していないのであるが、それはこれがゴート人の侵入でなかったと判断した結果であるのかもしれない。逆に言えば、ヨルダネスが言及していない侵入事件は、ゴート人の侵入ではなかった可能性がある。そもそも、史料上の「スキュティア人」は、ゴート人のみを指しているわけではないこ

とは、銘記しなければならないであろう⁶³⁾。

ゴート人が侵入者の一部に過ぎなかったと考えられる事例は、他にもある。248年にアルガイトゥスとグンテリクスに率いられた侵入は、ゴート、タイファリ、アスディング、カルピ、ペウキの諸部族の侵攻であった。この出来事は、ヨルダネスが言及するため、主体がゴートであり、これに他の諸部族が同道したことになるが、ゴートが中心であったかどうかは、疑わしい。またクニウアの撤退後、ガルス治世に起こった侵入についても、ゾシモスは、「ゴート、ボラニ、ウルグンディ、カルピ」がヨーロッパの諸都市を荒らしたと記していた。

ゴート人は、4世紀に始まるゲルマン民族の大移動の先駆けとなり、また東西のゴート王国を建設したという歴史的意義の重要性に加えて、特別に『ゴート史』などの史書が残されているためもあり、われわれは、3世紀にもその歴史像を投影し、ゴート人が常に主役であったかのような見方を取ってしまうが、3世紀の史料をそのような先入観なく読むならば、ゴート人はあくまでも当時ローマ帝国に侵入した部族の一つに過ぎなかったことが知られるのである。先に言及したペトロス・パトリキオスは、ゴルディアヌス3世の治世に、カルピ人が自らのほうがゴート人よりも「より強大である」にもかかわらず、年金を受け取っていないとして帝国側に不平を訴えていたことを書き残していることも示唆的である。ゴート人が、3世紀においてドナウ川北岸の有力な集団であったことは否定できないが、まだ支配的な勢力ではなかったように思われる。

そして、この結論は、通説へのさらなる懐疑をもたらすことになる。通説によれば、ゴート人の侵入は、民族移動の余波という形で起こったものであった。しかし、もしそうであるならば、3世紀の侵入事件は、ゴート人のみの侵入、あるいは少なくともゴート人主体の侵入でなければならない。しかし、実際には、先に見たように、ゴート人は、ワンオズゼムの「蛮族」として略奪のために侵入してきていたのであり、新来のゴート人がローマ帝国侵入への主体、あるいは原因であったとは言い難いように思われる。

ゴート人が新来の部族であったと伝えるのは、ヨルダネスである。ヨルダネスによれば、ゴート人は、最初、スカンザ島(Scandza)に住んでいたが、ベリグ王の時に、船で今日ゴティスカンザ(Gothiscandza)と呼ばれている地に渡った。その後、彼らは、「大洋の岸辺に住んでいた」ウルメルギ人の地に移り、その地を占拠した。近隣のヴァンダル人をも支配下に置き、やがて人口が増えたため、ベリグ王より五代後のフィリメルという王の時代に、スキュティア人の土地に移動したというのである⁶⁴⁾。ヨルダネスは、この伝承はゴート人の口碑に伝えられており、またアブラビウスなる史家も記録しているとしている。そして、考古資料が、ヨルダネスの伝えるようなゴート人の移動を支持しているとの考えがヘザーによって強く打ち出されている⁶⁵⁾。ヘザー説の根拠は、ゴート人の文化とされる黒海北岸のチェルナコフ文化の形成に、ヴィエルバルク文化が深くかかわっている点である。ヴィエルバルク文化は、紀元後1世紀半ばからバルト海南岸に栄えた文化で、2世紀半ばから3世紀前半に

かけて、バルト海南岸から南東方向へ拡大し、やがてチェルナコフ文化の形成に繋がっていく。そして、このヴィエルバルク文化からチェルナコフ文化へは、火葬と土葬の併用、武器を埋葬しない習慣、また共通する女性の装身具などの習俗にまつわる特徴までもが継承されていくため、両文化の間には、単なる物質のやり取りだけにとどまらず、人間の移動があったと想定されているのである。要するに、ヴィエルバルク文化を担っていたゴート人が、民族移動を起こして、チェルナコフ文化を創造したと考えるのである。しかし、このような文化の伝播が、ゴート人によるものであったとする解釈は、あくまでもヨルダネスの記述が前提にあって初めて成立するもののように思われる。しかも、このようなヨルダネスの伝承とは異なり、同時代史料を利用した史書はいずれも、ゴート人が新来の部族であったとは伝えていないのである。

それゆえに、クリコウスキーのように、ゴート人は黒海北岸で新たに形成された集団で、「3世紀以前のゴート人の歴史は存在しない」との発言すら出てくることになる⁶⁶⁾。しかしながら、クリコウスキーのようにゴート人が何の核もなく、3世紀に忽然と黒海北岸で出現したと考えるのもあまりに不自然であろう。そもそもこのような立場に立てば、3世紀以前にはイラン語圏であったと思われる黒海北岸がゲルマン語圏になることが説明できない。またタキトゥスのゲルマニアにはよく知られているように、バルト海沿岸には1世紀に「ゴトローネース」なる名の部族がいたことが伝えられており⁶⁷⁾、名称の類似から考えても、これが3世紀のゴート人と無関係であるとも考えにくい。私見では、「ゴトローネース」の一部が、ただし必ずしもヘザーのように女子供や文化の移動までを伴う大規模なものを想定せずとも、戦士階級だけ、あるいはR. ヴェンスクスの言うところの「伝統の核 (Traditionkern)」の担い手⁶⁸⁾のみが南方へ移動し、その地の先住諸民族を支配、あるいは同盟する形で、新たに「ゴート人」を形成したのではないだろうか。それゆえに同時代のローマ人は、彼らを未知の、新来の部族としては描かなかったのであろう。

P・J・ギアリは、フン人の拡大に言及した個所で、次のようなトルコの碑文を引きつつ、核となる小規模な戦士団がいかに爆発的に巨大化しうるかを示している⁶⁹⁾。

「ハンである私の父は17人の男どもと出発した。[ハンが]進軍を初めたという知らせを聞くと、町に住む者は山に登り、山に住む者は(そこから)降りてきた。こうして男どもが集まると70人に達した。神が力をお授けになったおかげで、ハンである私の父は狼のようであり、敵は羊のようであった。各地に行軍を続けながら、父は男どもを集め鼓舞した。すると、総勢700人を数えた。[ハンである私の父は]地位とハンを失っていた民族、下男になっていた民族、トルコの勢力を失っていた民族をたばね、彼らに私の先祖のしきりに従うように命じた⁷⁰⁾」。

この記述は、言うまでもなく騎馬遊牧民に関する記述であるので、ゴート人にあてはめることはできないと思われるかもしれないが、私自身は、新たに形成されたゴート人は、騎馬遊牧民に近い習俗をもっていたかもしれないと考えている。248年にアルガイトゥスとゲン

テリクスを指導者にして侵入した集団の数は3万、またクニウァに率いられた集団は7万とされていた。この数が厳密に信頼できるかどうかは別にして、相当に大きな数字が伝えられていることは確かである。これに対して、西方のアラマンニ人についての研究を行ったドリンクウォーターは、軍人皇帝時代に侵入したアラマンニ人が2~300人の戦士集団に過ぎなかった、またこれらが複数合同しても、2000人程度であったのではないかとの推測を行っている⁷¹⁾。このような数字と比較してみるならば、ゴート人らの数は相当に大規模であり、ドナウ方面では、ローマへの略奪のために諸部族が有力な指導者の下、雪だるま式に膨らんでいるように見える。このような事態は、非常に騎馬遊牧民的である。通説は、ゴート人らを農耕民とみなしているが⁷²⁾、彼らは黒海北岸という、本来はスキタイ人やサルタマイ人が暮らした遊牧地帯に居住していたのであり、ゴート人らの諸部族は、騎馬遊牧民に近い生活スタイルをもっていた可能性は排除できないであろう。デクシッポスらが、彼らのことを「スキュティア人」と呼んだのは、単なる古典主義ではなかったのかもしれない。

そして、この新たなゴート人形成のきっかけは、ローマ帝国自体が与えたものであったように思われる。当時、ローマ帝国は、ササン朝の攻撃を受けて混乱していた。ササン朝は、230年代からアケメネス朝の旧領の奪還を目指して⁷³⁾、積極的にローマ帝国への侵攻を繰り返したからである⁷⁴⁾。特にシャープール1世の軍事行動は目覚ましく、ハトラの陥落を受けてメソポタミアに侵攻したゴルディアヌス3世を244年に戦死させ、後継のフィリップスに屈辱的な講和を結ばせた。先に見たように、フィリップスは、ゴート人への年金支払いを停止させたとされているが、これにはササン朝への賠償金支払いが絡んでいたことは疑いないであろう。さらに253年には、シャープール1世は、バルバリッソスで6万のローマ軍に大勝し、シリアへ侵攻、ヒエラポリスやアンティオキアを陥落させた。この侵攻はエメサの神官であったウラニウス・アントニヌスやパルミラのオダエナトゥスなどの抵抗を受けて停止したが、260年の侵攻の際には、シャープール1世はついにウァレリアヌスをエデッサで捕虜にするに至る。その後、シャープール1世は、ローマ領内に深く侵入し、シリアやキリキア、カッパドキアの37の都市を占領したと自ら誇っている⁷⁵⁾。アンティオキアも再度陥落した。この侵攻は、パルミラのオダエナトゥスによって撃退されたが、ササン朝の攻勢は、272年頃にシャープール1世が死去し、同王朝で帝位継承争いが起こり、混乱し始めるまで続いた。このようなササン朝が攻勢にあった期間が、ちょうどゴート人らの侵入の開始と終焉の時期(238年~272年)に一致するのは、偶然ではないだろう⁷⁶⁾。時間的な関係から考えてまずはササン朝の攻勢があり、これによって生じた混乱にドナウから黒海北岸の諸民族が乗じて、ローマ帝国への略奪目的への侵入を行ったと考えられるのである。つまり、ササン朝によって引きこされたローマ帝国の混乱が、ドナウから黒海北岸の諸民族をさまざまな形で略奪目的のために結集させ、これがゴート人の形成に繋がったと推定できるのである。

おわりに

通説によれば、3世紀のゴート人の侵入とされるものは、民族移動の果てにローマ帝国と境を接するようになったゴート人が主体となり、その余勢を駆って略奪のためにローマ帝国に攻め込んだものであった。しかし、本稿での分析結果は、そのような通説とは、二つの点で異なるものであった。

第一に、ゴート人は、おそらくは新来の集団ではなく、アレマン人やフランク人同様、その地で、すなわち黒海北岸で形成された集団であったように考えられる。言い方を変えれば、ゴート人と呼ばれる集団が、バルト海南岸にあらかじめ存在し、それが民族移動を起こしたのではないということになる。ただし、クリコウスキーのように、完全にバルト海との関係を否定するわけではない。ゴトローネースの一部が南下し、これを核に、新たにゴート人が3世紀に黒海北岸で形成されたと見たい。ゴート人の形成については、西ゴート・東ゴート人の形成、可変性については専ら議論されているが、それは3世紀にも当てはめて考える必要があるのである。

第二に、第一の結論の結果として、ゴート人は、民族移動の結果としてではなく、当時の帝国の混乱に乗じてローマ帝国への略奪を試みた集団であり、またそのような行動をとった集団の一つに過ぎなかったのである。この最後の点のような単純な事実が見えにくかった一因には、当時の史料に現れる集団を示す呼称が複雑であることがあった。ローマ人は、黒海北岸に居住した諸集団を総称して、ギリシア語では「スキュティア人」と呼び、一方、ラテン語では「ゴート人」と呼んだ。しかし、先行研究は、ギリシア語の「スキュティア人」をゴート人とみなし、ラテン語の「ゴート人」も、いわゆるゴート人だけを指すと考えたため3世紀にローマ帝国に侵入した異民族はすべてゴート人のように考えられてしまったのである。実際には、ギリシア語では、スキュティア人は、あくまでも黒海北岸に居住した者たちの総称であり、下位区分としてゴート人を置いて、両者を区別していた。一方で、ラテン語では、「ゴート人」の下位区分に、テルウインギなどの具体的な部族名を置いて⁷⁷⁾、両者を区分していたように思われる。

以上のような結論を踏まえると、後に民族移動を起こすゴート人は、3世紀に略奪敢行の必要性からゴトローネースの一部を核として先住民族を結集する形で黒海北岸において新たに形成され、4世紀以後に強大化し、ドナウ川北岸で唯一の、と言ってよい集団になったということになる。

最後に、3世紀のゴート人の侵入の歴史的意義について考えておきたい。3世紀の侵入は、繰り返し述べてきたように、略奪目的の一過性の攻撃であった。したがって、3世紀のゴート人の侵入事件は、2世紀に起こったマルコマンニー戦争、あるいは4世紀後半に起こったゲルマン民族の大移動とは、大きく性格を異にするものであったと言えるだろう。前者のマルコマンニー戦争に際しては、マルコマンニー人らは何らかの形で帝国への受け入れを要

求していたし⁷⁸⁾、後者のいわゆる民族移動も新たな居住地を求めたものであった。しかし、略奪のためにゴート人を初めとする黒海北岸の様々な種族が、例えばクニウアのような指導者の下に結集したことは重要である。この時期の結集を通じてドナウから黒海の北岸で、新たな「ゴート人」が形成されていったと推定されるからである。また一方で、4世紀以降のゴート人の強大化には、その前史である3世紀におけるローマの支援もあったのではないかと想像される。ローマ帝国は、しばしば夷を以て夷を制すべく、特定の部族に肩入れをしてきた。この点に関連して、ゴート人は、何度も引用してきた『シャープール1世業績録』が示すように、240年代からローマ軍に従軍していたことは注目してよいと思われる。おそらく、ゴート人の場合、何らかの作用でローマの支援が上手く行き、過度に強大化したのであろう。このように考えるならば、軍人皇帝時代のローマ帝国の混乱と帝国が伝統的にとってきた施策が、「蛮族」の強化に寄与し、後のローマ帝国の衰亡の一因となったということになろう。

(本稿は、2012年の第80回西洋史読書会大会における報告「3世紀におけるゴート人の侵入」の発表原稿を加筆修正したものである。)

註

- 1) 拙稿「軍人皇帝時代の政治的危機再考」『西洋史研究』新輯第39号、2010年、192-205頁。
- 2) 3、4世紀のゴート、ローマ関係全般の研究史については、B.Scardigli, *Die gotisch-römische Beziehungen im 3. und 4. Jahrhundert n. Chr. Ein Forschungsbericht 1950-1970*, ANRW, II, 5, 1, 1976, S. 200-285.
- 3) A. Alföldi, *The Invasions of Peoples from the Rhine to the Black Sea*, CAH, 1ed., 1939, pp. 138-164.
引用文は、159頁。
- 4) 増田四郎『＜増補＞ゲルマン民族の国家と経済』勁草書房、1969年、108頁。
- 5) 足立広明「古代末期地中海世界における人の移動と社会変容」『岩波講座世界歴史19』1999年、201～224頁。
- 6) P. Heather, *Empires and Barbarians*, Oxford, 2010, pp. 94-150.
- 7) M. Kulikowski, *Rome's Gothic War*, Cambridge, 2007, pp. 43-70.
- 8) F. Millar, P. Herennius Dexippus: *The Greek World and the Third-Century Invasions*, JRS, 59, 1969, pp. 12-29.
- 9) デクシッポスの断片については、2006年に独訳が刊行された。G. Martin, *Dexipp von Athen, Edition, Übersetzung und begleitende Studien*, Tübingen.
- 10) B. R. Rappaport, *Die Einfälle der Goten in das Römische Reich bis auf Constantine*, Leipzig, 1899, S. 4.
- 11) A. Alföldi, *The Sources for the Gothic Invasions of the Years 260-270*, CAH, 1ed., 1939, pp. 721-723.
- 12) 佐々木博光「普遍史から国民史へ（上）—ヨルダネス『ゲティカ』の成立と受容について—」『歴史研究』35、1997年、1～22頁。
- 13) Iordanes, *Getica*, 1.
- 14) P. Heather, *Goths and Romans 332-489*, Oxford, 1991, pp. 38-52. 以下、*Romans* と略。
- 15) バルビヌスとプビエヌスが皇帝であったのは、238年の1月末/2月初めから5月までのことであった。
- 16) A・アルフェルディは、アレクサンデル・セウェルス帝治世の231/2年には既にゴート人のローマ帝国への侵攻が始まっていたと考えている（Alföldi, *op. cit.*, p. 141）。
- 17) 『ローマ皇帝群像3』「マクシムスとバルビヌスの生涯」第16章。桑山由文、井上文則訳、京都大

- 学学術出版会, 2009 年。
- 18) K.Dietz, *Senatus contra principem*, München, 1980, S.243-244.
 - 19) 『ローマ皇帝群像 3』『3 人のゴルディアススの生涯』第 31 章。桑山由文, 井上文則訳, 京都大学学術出版会, 2009 年。
 - 20) Heather, *Romans*, p.37.
 - 21) *Res Gestae Divi Saporis*, 7. テクストは, A.Maricq, *Res Gestae Divi Saporis, Syria*, 35, 1958, pp.295-360.
 - 22) Petrus Patricius, *frag.*, 8.
 - 23) Iordanes, *Getica*, 89.
 - 24) Iordanes, *Getica*, 90-91.
 - 25) オストロゴタ王は, 後の東ゴートのテオドリック大王の先祖とされている人物であるが, 実在は疑わしい。ただし, モエシアとトラキアへのゴート人の侵入そのものは歴史的事実であろう。Iordanes, *Histoire des Goths*, Introduction, traduction et notes par O.Devillers. Paris, 2000, pp.148-149, n.149.
 - 26) タイファリ, アストリンギ, ペウキニはいずれもゲルマン系の民族で, アストリンギはヴァンダル人の一部で後のアスディンギ部ヴァンダルであろう。ペウキニは, バスタルナエ人の一部で, ドナウ川河口のペウケーに居住したものがこのように呼ばれたが, やがてペウキの名でバスタルナエ人も指すようになった (タキトゥス『ゲルマニア』泉井久之助訳, 岩波書店, 1979 年, 224 頁)。カルビは非ゲルマン系で, 属州ダキアの周辺に住んでいた。
 - 27) この時のマルキアノポリスの包囲の記述が, Dexippos, F.17 に見られる。
 - 28) Alföldi, *op.cit.*, pp.142-143.
 - 29) Iordanes, *Getica*, 101.
 - 30) ヴォルフラムは, この軍をアルガイトゥスとグンテリクスが率いていたと考えている。またタイファリ, アストリンギ, カルビ, ペウキニの部族もこのクニウァの侵攻に加わったと考えており, 要するにヨルダネスの伝えるフィリップス帝治下で起こった 2 度目のゴート人の侵入を, デキウス帝治下の出来事と見なしている。H.Wolfram, *History of the Goths*, transl.by T.J.Dunlap, Berkeley and Los Angeles, p.45.
 - 31) Dexippos, F.23 には, デキウスがプリスクスに宛てた手紙が記録されている。
 - 32) 後のブルグンド人のことであろう。
 - 33) Zosimos, 1, 27, 1; Alföldi, *op.cit.*, p.146 によれば, 252 年のこと。.
 - 34) Zosimos, 1, 28, 1; Alföldi, *op.cit.*, p.147 によれば, 253 年のこと。.
 - 35) Zonaras, 12, 21.
 - 36) ドリンクウォーターは, この出来事を 253 年のこととし, その指導者をクニウァと見ている。J.F.Drinkwater, *Maximinus to Diocletian and the "Crisis"*, *CAH*, vol.12, 2ed., 2005, p.41.
 - 37) Zosimos, 1, 29, 2 ; Zonaras, 12, 23 ; Syncellos, 715.
 - 38) Drinkwater, *op.cit.*, p.42.
 - 39) E.Demougeot, *La formation de l'Europe et les invasions barbares*, Paris, 1969, pp.416-417.
 - 40) ボランニ人は, サルマティア系の民族であったようである。A.Schwarcs, *Die Gotischen Seezüge des 3. Jahrhunderts*, Pillinger, R. (Hgg.), *Die Schwarzmeerküste in der Spätantike und im frühen Mittelalter*, Wien, 1992, S.47-57.
 - 41) Zosimos, 1, 32-33. なお, アルフェルディは, 254 年と 255 年の攻撃はボランニ人単独によるものであったと見ている (Alföldi, *op.cit.*, p.147-148)。一方, ヴォルフラムは, 1 度目はボランニ人単独, 2 度目はゴート人も参加していたとする (Wolfram, *op.cit.*, p.49)。
 - 42) Zosimos, 1, 34-35.
 - 43) Iordanes, *Getica*, 107, 108.
 - 44) Syncellos, 716.
 - 45) Alföldi, *op.cit.*, p.148. アルフェルディは, シュンケロスに従った解釈を行ったが, シュンケロス自体が 262 年と 267 年の出来事を混同して記述しているようである。
 - 46) M.Salamon, *The Chronology of Gothic Incursions into Asia Minor in the Third Century*

- A.D., *Eos*, 59, 1971, pp. 109-139; Schwarcs, *op. cit.*, S. 51-52.
- 47) J. Straub, Die Gotenkrige in der Zeit von Valerian bis Claudius, *Studien zur Historia Augusta*, S. 40-74; Demougeot, *op. cit.*, pp. 425-428 はアルフェルディに従っている。
- 48) Wolfram, *op. cit.*, pp. 52-56.
- 49) P. Heather, *The Goths*, Oxford, 1996, p. 41.
- 50) ヴォルフラムは、このグループをヘラス・グループと呼び、ゴート人が支配的な勢力であったとしている。Wolfram, *op. cit.*, p. 53.
- 51) T. Kotula, Nessos et Naissos, *Eos*, 79, 1991, pp. 237-243 ; E. Kettenhofen, Die Einfälle der Heruler ins römischen Reich im 3. Jh. n. Chr., *Klio*, 74, 1992, S. 291-313.
- 52) A. Goltz, Die Völker an der mittleren und nordöstlichen Reichsgrenze, *Die Zeit der Soldatenkaiser*, Berlin, 2008, S. 449-464.
- 53) *SHA, Aurelianus*, 22, 2.
- 54) ゴート人の侵入停止の背景にダキア放棄を見る見方もある。アウレリアヌスは、ダキア属州を放棄したが、その後、ゴート人はその矛先を旧ダキアに向けたと見るのである。
- 55) タキトゥスが「ゴート人に対する大勝利者」の称号を得ていることは、碑文史料から確認できる。
- 56) Ammianus, 31, 5, 17.
- 57) Rappaport, *op. cit.*, S. 79-93.
- 58) P. Heather and J. Matthews, *The Goths in the Fourth Century*, Liverpool, 1991, pp. 1-11.
- 59) Zonaras, 12, 24 も、ガリエヌスがヘルリ人と戦い勝利したと記している。なお、ゾナラスはヘルリ人が、「スキュティアとゴートの種族に属する」との説明をしているが、ここで言われているゴートは厳密な意味でのゴート人ではなく、スキュティアと共に黒海北岸の住民程度の漠然とした意味であろう。
- 60) 250 年、および 262 年の事例。「史料にみる「ゴート人」の侵入」参照。
- 61) Zosimos, 1, 42, 1. 『ローマ皇帝群像』の「神君クラウディウスの生涯」第 6 章には、ゴート人が、スキュティアの諸部族であるペウキ、グレウトゥンギ、アウストロゴティなど、多くの部族を引き連れて侵入したのとの記述があるが、4 世紀末になってから確認されるゴート人の部族名が含まれており、記述の信憑性は低い。
- 62) P. Damerau, *Kaiser Claudius II. Gothicus*, Leipzig, 1934, S. 67.
- 63) ゴシモス (1, 37, 2) などは、明らかにアラマンニ人を指してスキュティア人と呼んでいる。しかし、基本的には、漠然と黒海北岸に住んだ諸民族のことを指す言葉なのであろう。
- 64) Iordanes, *Getica*, 25-27.
- 65) Heather *op. cit.*, pp. 107-121.
- 66) Kulikowski, *op. cit.*, p. 67.
- 67) Tacitus, *Germania*, 44.
- 68) R. Wenskus, *Stammesbildung und Verfassung*, Köln, 1961. ヴェンスクスの見方とその評価については、南川高志「『背教者』ユリアヌス帝登位の背景」『西洋古代史研究』第 10 号、2010 年、1～21 頁、特に 12～14 頁参照。
- 69) P・J・ギアリ『ネイションという神話』鈴木道也、小川知幸、長谷川宣之訳、白水社、2008 年、128 頁。
- 70) この碑文はギアリの前掲書からの引用であるが、これはいわゆる突厥碑文の一つであり、江上波夫『騎馬民族国家』中公文庫、103 頁にも同じ碑文と思われるものが載せられているが、一部訳が異なる。
- 71) J. F. Drinkwater, *The Alamanni and Rome 213-496*, Oxford, 2007, p. 61.
- 72) ギアリ (前掲書、119 頁) は、ゴート人の一派グレウトゥンギは、「4 世紀までにスキタイ人の特徴を吸収していた」としつつも、その社会は「定住性のある農耕社会であった」としている。
- 73) Herodianus, 6, 4, 5.
- 74) ササン朝の侵入の経過については、B. Dignas and E. Winter, *Rome and Persia in the Late Antiquity*, New York, 2007, pp. 18-32; J. Wiesehöfer, Das Reich der Sasaniden, *Die Zeit der Soldatenkaiser*, Berlin, 2008,

S.531-569, を参照。

75) *Res Gestae Divi Saporis*, 34.

76) 3世紀のローマ帝国の危機の原因にササン朝の動向が深く関わっていたとの見方については、
D.S.Potter, *Prophecy and History in the Crisis of the Roman Empire*, Oxford, 1990, p.62 参照。

77) Heather, *Romans*, pp.331-333.

78) 市川雅俊「マルコマンニー戦争再考」『防衛大学校紀要』53号, 1986年, 79～88頁。

《English Summary》

The Invasions of the Goths in the Third Century

Fuminori INOUE

In the third century, the Roman Empire was repeatedly invaded by the Goths. In 251, the Emperor Decius was defeated and killed in Abrittus by the Gothic king Cniva; from the late 250's on, the Goths again and again attacked the cities of Asia Minor from the sea; and in 268 the Goths carried out a large scale invasion, reaching as far as the Aegean Sea. According to A. Alföldi and P. Heather, the Goths appeared in the Black Sea region during the third century, having migrated from the Baltic Sea region. Through the impetus of these migrations, the Goths invaded the Roman Empire through a series of raids.

In this article, by examining each of these invasions individually, the author draws the following conclusions: Firstly, that the Goths were not newcomers in the Black Sea region but formed in that region, similarly to the Franks and Alammani, and that they raided the Empire not through the impetus of migrations but by taking advantage of the military crisis caused by the Sassanids. It is no coincidence that the Sassanid civil war in the 270s began when the Gothic invasions ended. Secondly, that during the third century, the Goths were no more than one of many invaders of the Roman Empire. It was probably not until the fourth century that the Goths became the dominant power in the Black Sea region, and we must be cautious not to adopt a Goths-centric view.